
?神葬?

ましろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

？神葬？

【Nコード】

N0873Z

【作者名】

ましろ

【あらすじ】

はじめての投稿です。アドバイスいただけたら嬉しいです。

（あらすじ）

神隠しにあい、異世界に連れていかれた幼馴染の長門美春を助けるため…そして姉を守るために異世界に自ら旅立った主人公、財部要彼を待っていたのは神葬しんそうと呼ばれる神々と殺し合うゲームだった…。能力を使い神と闘う高校生たち。彼らは無事生きて帰れるのか…。そして神葬の本当の目的とは

第1話：少女

ジリリリ

「…朝か。」

部屋に目ざまし時計の音が響く。

「うるさー……………い！」

手探りで何とか探し出し無事止める。

「あと5分は寝れるな…」

と、布団をかぶり夢の世界へ…旅立とうとした時

「とうっ！」

「げふっ！…ねえちゃん！？」

「いつまで寝てるの！起きなさい！」

ちなみに、家のねえちゃんは笑顔で暴力をふるう人だ。

「おはようのぱんち」

「いやいやいや！」

「起きないともう一回ぱんちいーしちゃうぞ？」

「起きます！俺マジで起きます！これでもかかってくらい起きます！」

「よろしい。」

「たつく…ない胸張っても…ひでぶ！」

「何か？」

「何も…」

ちなみに家のねえちゃんは貧乳だ。

「…痛い！……………え！？なんで叩いたの？」

「心の声が聞こえた。」

お前はどこの老師だよ…。

と心の中で毒を吐きつつ準備をする。

「じゃあ…行ってくる。」

「行っってらっしゃーい」

「まったく…なんでいつもいつも『ぱんち』するかな…」

「愛…じゃない？」

「愛か…ってうわ！」

俺の横にはいつのまにか、ながとみはる長門美春通称『みはるん』がいた。

「どうしたんだい？なんて」

「おま…いつから。」

「私はいつでもいるよ？」

「…。」

「なんて…ね。ついさっき君が見えたから時速800kmで来たんだ。なんて」

「時速は置いといて…どうりでリボンがちゃんと無すべてないわけだ。」

どうしてみはるんが俺が見えたかというと。

実は家が隣同士で幼馴染だからだ。

「え！？嫌…みないで…」

「おい…誤解されるから止める。」

周りのおばさま方がこっちを見ている

「なんて…ていうか今日やけにパトカー多くない？」

「うーん…確かに。」

「だよねー。…おまわりさーん！こいつロリコンですよー！」

「お願い！止めて！マジで！嫌…本当にマジで！」

あ、やべ…。

警察来た。

「キヤハハハハ！」

「笑い事じゃないから…。」

「キヤハハハハハハハハハハ！死ぬ！死ぬ！！！」

「笑い事じゃないから！！マジで！」

あれから俺は警察に軽く20分くらい話を聞かれた。

「て…言うか…みはるん。逃げるなよ。」

「キヤハハ！」

少し話していると、ガララ…

と音を立てて担任が入ってきた。

「えー…今日は…もう帰っていいぞ。」

「よっしゃー！」

「え、何ですか！？」

誰かが担任に聞いた。

いや…俺だって疑問だけど、変えられるなら万歳。

「あー…このごろあるだろ…神隠しって言う事件。」

神隠し、最近ニュースになっている事件だ。

なんでも全国の高校生が突然行方不明になっているらしい…って、まさか。

「…我が高校でも神隠しにあつた生徒が出たため…今日はもう解参だ。気を付けて帰るように。」

「怖いね…」

「ああ。てか…腕さりげなく組むなよ。」

「あら嫌だ、私たち夫婦じゃない？」

「夫婦じゃない。」

「ほら、夫婦じゃない。」

「違うから！イントネーションが違うから！」

「キヤハハ」

「…ん？何だあれ。」

おらたちの前方4～6m

「なにあれ…」

真っ黒なコート？を来た人が立っている。

「何だあれ…怖」

と、突然。

「！？」

こっちに向かって歩いてきた！

一歩一歩、ゆつくりと。

丸で相手の領土を侵略していくような…。
そんな歩み。

「……………」

「？」

何かつぶやいている。

「長門美春さんですね？」

「え！？あたし！？そうだけど…」

「本人と承認しました…転送します…」

いきなりみはるんの腕をつかんだ。

声からして男。

ではなく今大事なのは

「ちよちよちよちよ！！！」

手をつかんだままぐいぐいと引つ張っていく。
って見守ってる場合じゃねえ！

「おい！何やってんだよ！！！」

男の腕を振り払おうと腕をつかんだが…

「なっ…」

手が…腕をすり抜けた！？

「何だこれ…！」

「……………」

男は黙々と歩いて行く。

そして何も無いところに手をかざし

「いい！？」

手を横に動かしたかと思うと今まで何もなかった場所にゆがんだ空間が現れた。

そしてそのまま

美春を引きずっていく。

美春は何か叫んでいるが聞こえない。

その顔には恐怖、不安…その他諸々負の感情が出ている。

「……………」

もう一度俺は手を伸ばす。

そして、美春の腕をつかもうとしたが…。

「美春!!」

美春は男に引きずられ…、そのまま中に…。

「美春!! 美春ううううう!!!!」

男と美春が入った後、あの異様な空間は消えてなくなった。
本当に、文字どおり…『消えた。』

「うううう…くそつくそつ…ううう…あああああ!!」

俺は悔しさとか悲しさとかいいよのない気持ちで泣き叫んだ。

第1話：少女（後書き）

少し長くなってしまいました。

書いてみて、主人公の名前が出てないことに気づいたので、本名を書きます。

主人公：財部要^{たからへかなめ}

感想いただけたら嬉しいです

第2話：再来（前書き）

アドバイスいただけたら嬉しいです。

第2話：再来

何分…いや、何時間か。

俺はいつたいどれほど泣いたのだろう。

「……ただいま」

「ん…元気ないね？」

「いや…大丈夫。」

「そう。ならよし。」

嘘だ。

本当は胸が張り裂けそうだ。

だけどもまだに信じられない。

目の前であんなことが起こる何て…。

俺は階段をのぼりながら考える。

「なんなんだよ…なんなんだよあれ…」

空をつかむ俺の手。

俺は確かに美空を掴んだ…。なのに。

「…。」

パソコンを立ち上げ、俺はあるキーワードを入力する。

『神隠し 行方不明 』

クリック。

「……。」

どのサイトでも同じような内容ばかり。

何の役にも立ちはしない…。

「美春…。」

自然と口から出てきた言葉。

美春との思い出が次々とよみがえる。

頬を何かが伝って落ちる。

「……………涙……」
気づかなかった。
俺はいつの間にか泣いていたのか……。

数分。

俺は調べていた。

神隠しと呼ばれる行方不明事件について。

「……ん？」

『神隠し 生還者の談』

何だこれ……。

俺はその言葉が気になり、クリックをしようとしたその時。

「きゃあああああああ！」

「！？」

一階からねえちゃんの悲鳴が聞こえてきた
痛感を伴う悲鳴とは違う、恐怖、恐れ……そういった悲鳴。

「まさか……まさか……ねえちゃん……！！！」

俺はドアを勢いよく開け、階段をまるで落ちるように走る。

「ねえちゃん……！！」

居た。

キッチンにねえちゃんと、見覚えのある格好。

真っ黒なコート。

「ねえちゃん！逃げろ……！！」

男がねえちゃんに歩み寄る。

ゆっくと……。

「いや……来ないで……」

「………………。」

男は無言で近づき、ねえちゃんの手をつかもうとする。

俺の脳裏にあの時のことが浮かぶ。

神隠しの扉があき、美春を連れていかれ

何もすることができないまま、泣き叫ぶ俺。

「う……うあああああ！！！！」

「……………！！！！？」

気が付いたら殴っていた。

自分の意思というよりは反射。

落ちたナイフ拾うために手を伸ばしてしまうようなそんな危険な反射。

男は派手に吹っ飛び食器が散らかる。

が今はそんな場合じゃない。

「ねえちゃん！！こつち！！早く！！」

「う……うん……！！」

俺は男が倒れている間にねえちゃんの腕をつかみ走り出す。

玄関を飛び出し。走る。

どこに逃げればいい？

あの男から逃げるにはどこに……！！

要と姉、千華^{ちか}が逃走した後のキッチン。

倒れたままの男のそばに、一人の女が立っていた。

手には何か書類を持っている。

「…………貴方とも在ろう御方が人間ごときに負けるなんて…、いったい何があつたんですか？」

倒れたままの男は上半身だけ起こし、答える。

「何も…………それより…プレイヤーを一人増やそう。」

「それは…どなたですか？」

「財部…財部要だ…。」

第3話：情報（前書き）

アドバイス、感想いただけたら嬉しいです。

ちなみに今話の時間帯は昼の3時くらいです。

第3話：情報

「コーヒーでいい？」

「うん…ありがとう。」

男が家に来てから俺とねえちゃんは家を飛び出し、近くのホテルに泊まっていた。

金は途中のコンビニによっておろしてきた。

俺の貯金はほとんどなくなったが今はそんなことを言っている場合じゃない。

「……助けてくれて…ありがとう。」

「うん。…無事でよかった。」

ねえちゃんからもらったコーヒーを一口飲む。

暖かい…

「あの…」

「？」

「あの男の人は…誰なの？」

「俺も、分らない…。ただ。」

「？」

「……あの男のせいで、美春は神隠しにあった。」

「え！？」

俺はそのあとねえちゃんに全てを、見たまま話した。

美春が連れていかれたこと、俺が何もできなかったこと。

「…そうだったんだ…。」

「うん…。」

「疲れちゃった…、寝るね…。」

「うん。」

「あ」

「？」

「襲っちゃ、ダメだぞ！」

「分ってるって！」

「ふふ…おやすみ。」

「おやすみ。」

早くも寝息を立てて寝ている。

早い。恐ろしく早い。

「そう言えば…」

俺はあることを思い出し、携帯を取り出した。
部屋のパソコンで見たとある記事。

『神隠し 生存者の談』

「…あつた。」

見つけた。このサイトだ。

「…。」

俺は読み進めて行く。

「……」

最後まで読むといろんなことが分った。

一つ目、生還者は現在4名

二つ目、内わけは男2人女2人

3つ目、内2人はまた行方不明に

4つ目、1人は死亡

5つ目、女1人は生きている、正常な神経

そして最後に、最も大事なことが。

生き残ってる一人がこのホテルから駅2つ分なのだ。

「……………行くか。」

俺は紙に

『とある女性のところに行ってきます。夜には帰ってきます』
と書き、荷物を準備し、部屋を出た。

「待つてろよ…………美春…。今助けてやるからな…。」

第4話：訪問

「ここか…。」

手もとの紙と見比べ、確かなことを確認する。

「よし…。」

インターホンを押す。

ピンポンと聞きなれた音がし、しばらくして一人の女の子が出てきた。

俺と同じ年くらいだろうか。

「はい、何ですか…？」

「あの…、氷室雪さん…ですか…？」

「そうだけど…何？」

出てきた女の子は髪が長く、メガネをかけていた。

クラスの委員長的イメージだ。

「……神隠しについて…聞きたいことが。」

神隠し、という言葉聞いて、氷室の表情が変わった。

「へー…君も茶化しに来たの？私、そういうの興味ないんだ。じゃあね。」

そういつてドアを閉めようとする。

「ちよっ！待って！！」

間一髪、ドアの間に手を入れ、それをふさぐ。

が、お構いなしに彼女はドアを閉めようとする。

「痛っ…！お願いします…！俺の友達が連れていかれたんだっ…！！」

「…あら。ごめんなさい。そうだったの」

そう言つてドアを緩めてくれた。

が、俺の手は赤くなっている。
痛い。

「じゃあ…そこに座ってて。紅茶でいい？」
「あ…ああ。」

しばらくして、二人分の紅茶を持ってきた彼女は開口一番こう問いかけてきた。

「貴方も…いえ、あなたのお友達も男連れていかれたの？」

「え！？なんで…それを……。」

「ならもう死んでるかもね。そのお友達。」

「はあ!？」

「これは冗談でも、脅しでも、からかいでもなく。本気。あの世界じゃあ人間なんて簡単に死ぬの」

「あの…世界。」

「そう、私が連れていかれた世界…。そうね…まずは順を追って説明するわ。」

五分か、十分くらい。

氷室の話を聞いていた。

氷室の口から出てくる言葉はとても信じがたい言葉だった。まず。

「その…『神葬』^{しんそう}って言うのは…？」

「言うならあそこで行われるゲーム。お友達もきつと…いえ、絶対参加してるわ。」

「『神葬』って何をする…ゲームなんだ？」

「文字どうりよ、神を殺すの。」

そう言っただけに金属でできたプレート一枚見せてきた。
何やら文字の形だ。

「読める？」

「いや…。」

「『氷』よ。あっちの世界では一人一人こういった漢字のプレートが貰えるの。」

氷室が言うには、異世界に飛ばされた後、空にパソコンのウィンドウが現れて、こう書かれるらしい。

『生き残るための漢字を空に書き、唱えよ。さすれば神を葬る力が与えられる。』と。

「それで…『氷』？」

「そう、その時は何書いていいか分らなかったから…私の苗字、氷室から氷をとったの。で、このプレートを身につけていると。」

そう言っただけで紅茶はまだ入っているコップを一旦持ち上げ。

「え！？」

こぼす。

が

出てきた紅茶は決して流れることがなかった。

「え…なんで…」

「ふふ…。答えはこう…。ね？不思議でしょう？」

そう言っただけで俺にコップを渡してきた。

「紅茶の氷の出来上がりよ。」

「す…すげえ…」

「……さっき、私がお友達はもう死んでる…って言ったでしょう？」

「ああ。」

信じたくない…。

そんなことは信じなかった。

「神様は…あなたが想像しているよりも、邪悪で最悪で凶悪で横暴で粗暴で絶望で破滅で暗黒で終焉で闇で孤独で……人間がこんなやつばけなプレートでかなうほど弱くはないのよ」

そこまで言っただけで続けた。

「私が言えることはこれくらいかな。……じゃなかった、まだあった。」

おい！

と心の中で突っ込みを普段なら入れるのだが、今はそんな場合じゃ

ない。

「あつちに行ったらミッションがあるの…それを規定数クリアしたら…こつちに戻ってこれる。…がんばってね。生きて帰ったら…またおいで。」

氷室に別れを告げ、俺は駅で電車を待っていた。

「あと…6分か。」

思ったより早かった。

なんてことを考え、今日あったことを思い出していた。
いろんなことがあった…。

美春…待ってるよ…俺が絶対助けてやる…！

その時、俺の後ろから声がした。

『あの』声が。

「財部…要さんですね?。」

第5話：旅立（前書き）

この話で第1章完結します。

第5話：旅立

もしかして…あの男か！？
と、思い俺は振り返る、が

「…あなたは」

俺に声をかけてきたのは一人の女性だった。

「はじめまして。……ところで、単刀直入何ですけど。」

「ん？」

「異世界に行きませんか？」

「なっ！？」

この女…笑顔で…というか。

「あの男の…知り合いか…？」

「ええ。まあ…あなたが行かないというのなら」

「行かないなら？」

「貴方のお姉さんが参加されるだけですが…。どうしますか？」

ニコツと笑顔で問いかける女。

が、その内容は真逆。

「てめえ…ねえちゃんに…」

「手なんか出しませんよ…。それに、我々としてもあなたが参加した方が面白そうなのですが…。どうしますか？嫌ならいいんですよ。お姉さんが死ぬだけですから。ふふっ。」

くそっ…！

くそくそくそ！

そんなの俺に選ぶ権利なんかないじゃないか…！

くそっ…！

「悪魔め…」

「悪魔じゃないです…。それにどっちにしろ行くつもりだったのでしょう？」

「…本当にねえちゃんは無事なんだな…？何もしないんだな…？」

「ええ。我々は約束を守りますよ。」

「くそが…。」

「何とでも…」

女が右手を掲げ、パチンツ…。

その瞬間。

「なっ…!!??」

俺と女以外全ての人間の動きが止まったのだ。

まるで、彫刻か、蠟人形のように…。ピクリも動かない。

「ふふ…これが神の力です。…ではこちらに。」

そう言つて女も男同様何も無い空間にあの扉を作った。

「一つ…頼みが…。」

「何でしょう…?」

「ねえちゃんに…絶対生きて帰ってくる…そう伝えてくれ。」

「はい。…では」

「……。」

俺は自ら歩を進め、あの異様な空間に入っていく。

日常と非日常が交わるこの空間。

一度はいれば簡単には出られないだろう…。

だが、俺は行くしかない。

行かなければならない。

みはるんを…。そしてねえちゃんを守るために…。

要が異世界へ旅立ち、扉が閉じられる。

「ふふ…。生きて帰ってくる…。ですか…ふふ」

第6話：幻狼（前書き）

この話から第2章が始まります。
アドバイス、感想いただけたら嬉しいです。

第6話：幻狼

「ん…」

ここは…？

辺りを見渡す。

さっきまでいた駅とは明らかに違う。

というか此処…日本か？

俺が目覚めた場所は草原。後ろには森。

こんな場所が日本なわけがない…ということは…。

「ここが…異世界…。神葬の…世界。」

おれ以外にも数人…、いや数十人高校生が居る。

「…そうだ！」

俺は美春を捜しに来たんだ

「すいません…長門美春っていう人…知りませんか？」

俺は取りあえず一番近くに居た人に声をかけた。

が…。

「さあ……………分らない…。」

そのあと全員回答が同じ…。

予想はしていたが…。やはり。

「本当に…死んでしまったのか…」

いや…。そんなはずは…。

それから数分たったころ、空に何かが現れた。

巨大なソレはまるでパソコンのウィンドウ…。

3次元の世界に2次元が…。

奇妙だ…。

「なんだあれ！！？」「ウィンドウ…？」「なんだよれ…」
皆同じような声を出してる…。

「あれか…。」

氷室が言っていたウィンドウ…。

てことは…。

『ようこそ。神葬の世界へ。プレイヤーの皆さまにはこれからミッションをクリアしてもらいます。』

「なんだよ！神葬って！」「ミッション…。」

一旦書かれた言葉がすべて消え、そして新しい文章が出てくる。

『この世界で生き残るための漢字を地に書き、そして唱えてください。そうすれば…あなたに素敵なプレゼントが。』

漢字…。

俺は氷のプレートを思い出す。

この世界で生き残るためにはどんな漢字が良いんだ…。

「…。」

俺はしばらく悩む。

だめだ…。思いつかない…。

焰？剣？

どうやったら…美春を探せるんだよ…。

「…探す…。」

そうだ…。

俺の目的は美春を探し、無事生きて帰って来ること。

それが第一。

「よし…。」

俺は地面に『探』と書く。

そして…。

「…たん」

その瞬間。

「なっ！？」

一瞬地面が輝き…そして。

光の代わりに出てきたのが。

「これが…」

俺はそれを手に取ってみる。

ブロンズ色の軽いプレート。

「俺の能力…」

辺りを見渡してみるとおれ以外にもすでにプレートを手にしている人は結構いた。

皆ブロンズ色だ…。

氷室のは確か…白だったけ…。

なにか違いでもあるのか？

なんてことを思っているときまた文字が書かれた。

『プレイヤーの皆さまがプレートを得たので能力の使い方を説明します。そのプレートを身につけ、能力をイメージする…。それだけです。直接肌に触れている時のみ能力が発動可能ですので、お気を付けて。』

「なるほど…」

イメージ…か。

探すってことは…ダウジングとかか？

それから数分たったところ、新たな文字が…。

が、その内容は今までとは違った。

『ミッション？1 フェンリルからの逃走/24h』

「フェンリル……ってなんだ？それに…24時間？」

俺がそんなことを考えてると誰かが声を上げた。

「おい！…！なんだあれ！…！なんか出てきたぞ！…！…！」

短髪の男が指差す先には黒い影。

第7話・悲鳴（前書き）

ちなみに、時刻は朝っていう設定です。

第7話：悲鳴

「なっ…なんだよあれ…!」

明らかにこの世の生物じゃない!

明らかに近づいてはだめ!

「ん?」

誰か…近づいてないか…

「へっへー…俺の能力のいい練習台になってもらっぜえー!」

一人の茶髪がフェンリルに近づいてる。

後ろを振り向き皆に手を振り。

「俺が打っ殺すからな! お前ろみとけよー!」

その右手にプレートを持ち、フェンリルに近づく。

フェンリルは何もしてないが…、明らかに獲物を見る顔だ。

「GRRRRR……」

威嚇している。

が茶髪は気にせず突っ込む。

「おい!! 馬鹿!! 止める!!」

「んあ? ……ぐっ!?」

止めようと声を出したが無駄だった。

今までそこに居た茶髪の右腕が…右腕が。

「ギヤアアアアアアアア!! ……!!」

右肘から先が無くなってる!?

その先はどこか想像したくないが…。

皆の視線がフェンリルに集まる。

「手が!! 手が!! ……俺の手がああああああ!! ……!!」

フェンリルの口からはみ出してるあれは…。

「GRRRR……WOOOOOOOOOOOOOOOOO!!!」

一際大きな咆哮を上げてのたうちまわってる茶髪にフェンリルが向かっていく。

俺たちはそれをただ見守るしかなかった。

「ひ…ひ…やめろ…やめろ…うわあああああああ!!」

「……嘘だろ」

誰かが呟いた。

だけど、これは嘘なんかじゃない…。

現実だ。

今までそこに居た茶髪はそこになく…今はただ血だまりが…。

そこまで考えた時、俺は走り出していた。

「WOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOO!!!……!!」

どこに向かって走ればいい!?

どこに逃げたら…どこに逃げたらアイツから逃げれる!!

俺は後ろにあつた森に向かって走り出した。

無我夢中で走る。

おれ以外にも…走り出した。

アイツから逃げるために。

「キヤアアアアアアアアア!!!!」

後ろで誰かの悲鳴が聞こえた。

だけど、俺の脚は勝手に動く。

見てる暇なんかない…。

また悲鳴が聞こえてきた。

恐怖と不安で押しつぶされそうだ…
体が勝手に震える…。

今、何分たった…

ミッシヨンは一体何分たったんだ…。

空は…まだ明るい。

てことは…12時くらいか…。

後…18時間くらいか…。

「……………ねえちゃん…ごめん。」

祝！200アクセス

今日アクセス数見てみたら200でした！

FOOOOOOOO！

読んでいただいた皆さま、ありがとうございます。

こんな駄作を読んでいただけるなんて（涙）

はじめての投稿で正直不安でしたが、読んでいただけて嬉しいです。

文章は下手

誤字がある

脱字もある

分りづらい

などと…

いろいろ改善点がありますが、これからも一生懸命頑張って日々精進したいです。

アドバイス、感想待ってます。

これからも厨二病全開で行きます。

痛いだなんて言わないでください…

これからも神葬をよろしくお願いします。

（・・・）ノシ ましろ

第8話：具現

つて…

何考えてんだ俺のばか…。

死ぬなんて…考えちゃだめだ！

生きろ…生きるんだ俺。

此処では本当に死ぬ…。

けど…生をあきらめるな…。

「生きて…帰らなきゃ…！」

美春を連れ戻し、ねえちゃんに笑顔で『ただいま』

「よしっ…。」

生きるためには、まず。

「能力…か。」

俺はもう一度プレートをよく見てみる。

『探』これが俺の能力。

氷室の家で一度見た。だからこれが玩具じゃないことは分ってる。

「確か…。」

イメージ。そうだ、能力をイメージするんだ。

「探す…か……」

俺は目を瞑り想像する。

「…っはー…はっー…」

だめだ。

できない…。

「ウワアアアアアアアアアア！！」

またどこかで悲鳴が聞こえてきた。

「もう一度…。」

俺は地面に絵を描く。

その方が想像しやすいと思ったからだ。
けど。

「うわ…なんだこれ…」

俺が書いたのは○の中に矢印がある絵。
コンパスのつもりだったんだが…

「まあ…いっかよし…」

俺はもう一度、想像する。

呼吸を整え、そして深呼吸。

鳥のさえずり…

草の揺れる音…

「……で…」

ある。

俺の右手には確かにソレがあった。

「できた…！できた…！できたああ…！」

俺は小さくガッツポーズをする。

ソレはコンパスだった。

ただ、他のコンパスとは違い、俺のは矢印が一つだけ。

その先っぽが今は動いてないが…。

きつと探したい人の位置を示してくれるだろう…。

「よし…美春の…美春の位置を…」

俺はどうしていいか分らなかった。

本当にこのコンパスが美春の位置を示すのかさえ分らない。
だが、今は小さな希望にかけるしかなかった。

「お…おお」

すこしずつ…少しずつではあるが。

今まで微動だにしなかった針が動きだした。
示す位置は俺の方向。

「え…てことは…」

俺は後ろを振り返り、もう一度念じる。

嘘であってほしかった。

何せ、俺がさっきまで来てた道っていつたら…

「……もう一度…行かなきゃだめだのか…」

あの怪物が居る場所へ…
もんすたー

「その前に…一度寝ておこう。」

周りを見ると空は暗くなっていた。

時計が…というか物が何も無くなっているから時間が分らない。

明日になったら、一日歩き続けよう。

今日はいろいろあったな…。

「待つてろよ…美春。」

要がコンパスを具現化している頃、草原に一人の男が居た。

茶髪とは別のフェンリルに食べられた男。名前は木原結城

「…うつ！…っはー…はー…」

彼は生きていた。

いや、正確には『蘇った』

「よかった…『蘇』にしてて…」

細切れになった彼の肉体は少しずつ、少しずつ再生し、今に至ったのだ。

「……よし…この能力がある限り、俺は不死身だ…！」

笑いが止まらなかった。

狂ったように笑い続ける。

が、その笑いは一声で止まる。

「へー……『蘇』か…良い能力だね。」

「なっ…！？」

後ろを振り返る。

今まで誰もいなかったはずのそこに男が一人立っていた。
1年生くらいか…。身長は少し低い。

そして何より。

木原を驚かせたのは…

「ない…」

数分前まで確かに右手にあったはずのプレートがなくなっていたのだ。

「…あ、もしかしてこれ探してるのかな？」

そう言つて右手を差し出してくる。

その中には。

「てめえ……！」

『蘇』のプレートが…。

「返せ！！俺のプレートを返せ！！」

「返すわけないじゃん」

「なっ…てめえ…かえさねえとぶっ殺すぞ…！」

「やってみたら？」

「うおおおお！！」

右手を振り上げ、殴りかかる。

が…しかし。

「！？」

すり抜ける。

まるで霧を殴ったかのようにすり抜けた。

「何が起こったか分からない？…実は…俺こ…んなにプレート持つてるんだ。」

そう言つて目の前の男が両手を見せる、中には。

「な…なんだよ…これ…なんでこ…んなに…」

軽く6〜8個のプレート。

木原には意味が分らなかった。

目の前の男がこ…んなに持つてる理由を。

「知りたい？実はね、皆が死んだあとプレートを集めて回ったんだ…」

「何で…」

理由は…

そう言つてにやりと笑う。

木原は直感で感じ取った。

『俺も殺す気だ』と。

「ウワアアアアアアアアアア！」

「神を殺して新たな神になる。」

その言葉は木原には聞こえてなった。

なぜなら。

「『針』…なかなか言い能力だね。」

地面からのびた巨大な針が木原の体を貫いていたからだ。

体に巨大な穴をあけ、生きていられるわけがない。

いや…数分前までなら蘇れた。

が、今は違う。

「これで9個か…次はどんな能力かなー」

鼻歌交じりに歩きだす、その姿はまるで新しい玩具を探す子供のようだった。

第9話：終了

嘘だ。

嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ…。

俺は息を殺す。

嘘だ。

俺は現実を受け止められなかった。

朝、目を覚ましたら…そこにフェンリルが居るなんて。

これはアニメや小説じゃないんだ…！

こんな展開が…。

嘘だ…。

「……………」

俺は腰を低くしたまま進みだす。

幸い奴は草の陰で俺が見えないらしい。

コンパスは消えているが、プレートがあるからまた出せる。

それよりも今はばれる前に逃げなければ…。

「GRRRRRRRR…」

フェンリルは唸っている

大丈夫…

ばれてない。

ばれてないばれてないばれてない…。

「……………」

後ろを振り返ってみる、大丈夫だ…。

こっちを向いてない…。

パキッ…………

嫌な音が響く。

「……………」

だめだ…脚が…

だけど…

俺は脚を引きずりながら逃げる。

逃げなければ…

「WOW!!」

「ぐあっ！」

なんだ!?

俺はまた吹っ飛ぶ。

今度は何かに躓いた感じはない…。

俺は後ろを振り返る。

そこには

奴が居た。

体当たり?

「GRRRRR……」

まるで獲物をいたぶるようにゆっくりと近づいてくる。

「う…うあ……………」

涙があふれ出てくる。

死にたくない…。

死にたくない

死にたくない死にたくない

死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない
!!!!

「うわあああああああ!!!!!!」

…おかしい。

俺は目を少しずつ開ける。

「え…」

俺は現実が飲み込めなかった。

何が起こったんだ…？

俺の目の前に奴はいなかった。

丸で本当に夢だったかのように…

しばらくすると空にあのウィンドウが現れた。

カタカタと…音を立てながら文字が書かれていく。

『ミッション？1終了。 死亡者数437人。生存者数2064人。』

第10話：帰還

空に浮かぶウィンドウには依然として文字が書かれている。

「死亡者数437人……」

自然と涙が出てきた。

これは何の涙だ……？

悔しさ？悲しみ？怒り？

死んでいった人のことを考えると涙が止まらない。

勝手にこんな場所に連れてこられてわけもわからないうちに殺され
たんだ…。

「畜生……」

美春…

そうだ…美春！

「生存者数…2064人…」

この中に美春が居ることを願う。

俺には願うことしかできない…。

「待ってるよ…美春……。」

コンパスをもう一度出し、再び歩き出す。

フェンリルから逃げるためにがむしゃらに走ったせいで、俺が居る
場所は分らないがこの針が示す場所に行けば大丈夫だろう…。

歩きだした瞬間。

カタカタと音がし、文章が再び書かれていく。

「何だ……？」

『第1回神葬 終了。能力について他言禁止。』

「な…終了！？俺はまだ美春を見つけてないんだ！帰るわけには…」

その時、俺の目の前にあの扉が現れた。

時空をゆがませながら…

そして、中からあの女が出てくる

「いいえ。帰っていただきますよ。」

「俺は……俺にはまだ探さなきゃならない人が居るんだ……。帰るわけにはいかない……」

「お姉さんがどうなってもいいのですか？」

「なっ……」

「帰っていただきます。」

俺に選択肢はなかった……

「くそっ……帰ればいいんだろ……」

「ふふ……さあ。こちらへ。」

女に手を出されたが俺はそれを無視して扉の中に入る
それが俺にできるせめてもの反抗だった。

「ここは……」

俺が出てきたのはあの駅だった。

周りは依然と同様人がある。

周りに居る人間を見ると涙が出てきた……

安心の涙だ。

「俺は……帰ってきたのか……」

「おめでとうございます。」

「……何がだ……」

「何がとは？」

「何がめでたい！一体目的は何だ！何人死んだと思ってやがる！！」

俺は殴りかかる……が。

またしても体をすり抜ける。

一体この女は何なんだ……！

「ふふ……無駄ですよ。」

そして、こう続けた。

「また来ます。……近いうちに。」

第11話：祝福

「……ん？」

俺はポケットに違和感を覚え、中の物を取り出してみる。

「ケイタイ……」

「そうだ！ねえちゃんは無事か……！？」

確かに俺は神葬をクリアした……が、ねえちゃんは……ねえちゃんは無事なのか！？

俺は急いで番号を打ち、ねえちゃんが出るのを待つ。
が、数分たつても出ない。

まさか……

「もしもし」

「もしもし！ねえちゃん！無事……！？」

「無事……そんなことより早く帰ってきて。」

「はい……」

一方的に切られた……。

声からして明らかに怒ってる……。

それも当然か……

「……ただいま……」

俺は怒られるのを覚悟し、扉を開けた。

が、結果は俺の予想をはるかに超えていた。

パン！

と音がし、俺にリボンがかかる。

「え……」

見あげるとクラッカーを持ったねえちゃんが笑顔で迎えてくれた。

「おっかえりー……！」

そう言つて俺に抱きついてくる。

「え…え…」

俺はまだ状況がよくわからなかった。

「さあ！こっちに来るんだ！！」

そう言つて一人キッチンに向かつて走っていく。

胸のあたりを見てみると濡れていた。

「じゃっじゃーん！」

キッチンに入ると豪華な食事がテーブルいっぱいに広がっている。
から揚げにお寿司、ジュースに…二人で食べきれないほどだ。

「これは…」

「おかえり。」

もう一度笑顔で俺に

俺も笑顔でもう一度

「ただいま。」

それから俺とねえちゃんでご飯を食べた。

お寿司は俺が好きなネタがたくさんあって、中に数個下手なできの
があつた…それはねえちゃんが作ったものだったらしい。腕により
をかけたらしく、そのできは…まあおいておこう。

「俺、怒ってるのかと…」

「最初は…電話が来た時は怒ったよ？でも…そのあと女の人に来て
ね。教えてくれたんだ。」

「そう…か…」

多分女つて言うのは…、あの女だろう…。

そう言えば、名前知らないな。

別に知りたくもないが。

「ちよつとこつち向きなさい。」

「え？…痛っ」

ねえちゃんの方を向くと思いつきりびんたされた。

意味が分らなかった…。

ただ頬が痛く、そこを抑えていると。

「…心配した。ずっと…ずっとずっと…ずっとずーっ
と…心配してた。…もう行かない？」

「……………それは…。」

「行くの…？」

俺が行かなきゃ…

美春を連れ戻せない…それに。

「俺は、行かなきゃならない。」

そこまで聞くとまたびんたがとんできた。

「行っちゃうの…？」

「…」

俺は無言でうなづく。

「そう……………ならもう…あたし知らない……………」

目に思いつき涙を浮かべながら、そう…呟いた。

「ごめん…。」

無言で立ちあがり、二階に上がって行った。

「……………」

俺は、なんて答えたらよかったんだろう。

あたしは馬鹿だ…。

本当はすぐくうれしかった…。

でも…また行っちゃう。

もう…行って欲しくない。

もう…あたしのそばから離れないでほしい。

「うう…うわああああん！」

第12話：腕輪（前書き）

これから場面が変わるところは を書くようにします。

第12話：腕輪

…俺はねえちゃんの部屋の前に立っていた。

「…入るよ」

ノックをしてから入る。

ねえちゃんはベッドに座っていた。

涙ぐみながら俺に話しかけてきた

「…本当に、また行くの？」

「……………ごめん。」

俺は謝りたかった。

ただ…謝りたかった。

そして、もう一度謝ろうとした時。

俺の後ろから声がした。

「ふふ…。姉弟中が良いんですね。」

「え…」

ねえちゃんの顔が引きつっている…

俺はだいたい予想がついていた。

だが…

いくら何でも…早すぎないか！？

「だ…だれ……………あなた誰！？どこから！？」

そこまで聞いて俺はある疑問を持った…

「え…？ねえちゃん…知らないの？」

「は…初めてだよ…て言うか誰！？」

どういうことだ…？

じゃあ…女って一体…

「ふふ。大丈夫ですよ。貴女には手を出しません……………ねえ？」

そう言っただけ俺の方を見た。

俺が行かなきゃ…殺すってことか…

畜生…

「…今から…行くのか…？」

「ええ。」

そう言つて、またあの扉を作り出す。

それを見てねえちゃんは悟つたのか俺の腕を引っ張る。

「だめ！！行っちゃ…行っちゃだめ！！」

目に涙を浮かべながら…俺に叫ぶ。

でも…

「でも…俺は…行かなきゃならない。……………ごめん。」

俺はねえちゃんの手を振りほどき、そして中に入つて行く。

ねえちゃんが後ろで叫んでる…。

でも俺は振り向かず…、ただ前も見つめ歩きだす。

もう一度…。

もう一度だけ、死線をくぐりに…。

そして、ねえちゃんを守るために。

「ううう…なんで…何でえ…」

泣き叫ぶ女…。

何でこんなにも人間は馬鹿なんだろう…。

貴女のために弟が闘っているというのに…。

「どうして、弟が行くのか…知りたいですか？」

私は、そう問いかけた。

「…」

女は黙つて頷く。

「本当は…本当は貴女のはずだったんです。」

「え？」

私は一から説明した。

貴女を助けるために、弟が旅立つことを…。

そして、神葬の本当の地獄を…。

「う…うう…うわああああん!!!」
ああ…

人間は本当に馬鹿だ。

「では、私はもう行きます。」

私は扉を作り、そして戻ろうとする。
が、私の歩みは女によって止められた。

「まって…」

「何か？」

「私も…私も行きたい………」

ここは…

「前に居た場所と同じか…?」

俺が居たのは森の中だった。

前に居た場所と同じかは分らないが…

「ん？」

右腕を見てみると、手首になにやら腕輪が付いている。
なんだこれ…。

銀色の腕輪は液晶画面が付いている。

「うわあ!!!」

いきなり、腕輪から音が鳴りだした。

ピッピッピ…と。

まるで時限爆弾化のように。

「なな…なんだこれ!!!?」

音がやんだかと思うと、液晶画面に文字が出てきた。

『プレイヤーの皆さま、ようこそ。神葬の世界へ。二回目からは新たなルールがありますので、説明します。』

「新たな…ルール…」

『その名は【リンク】リンクされた状態でその中のどなたかがミッションをクリアすると、リンクしたプレイヤー全員がミッションクリアとなります。』

「マジかよ…」

『リンクのやり方はいたって簡単。まずは腕輪の端子をつなぎます。

』

「端子…？これが」

見ると横の方にそれっぽいものが付いていた。

『2秒繋がますとリンクされます。…なを、現在のリンクしているプレイヤーなどは確認できませんのであしからず。』

そこまで文字が流れると一旦全て消えた。

そして、数秒後。

『ミッション？2 スケルトン10頭の討伐／制限時間168h』

第13話：骸骨

「スケルトン…って何だ？」

あいにく、俺はお化けとか神とかに詳しくない。
だからスケルトンとか言われても分らない…。

「一週間か……………」

今回は制限時間が長いな…

もしかして透明な敵なのか？

「今は…美春だな。うん。」

俺は制限時間が長いことを考え、いまは美春を優先することにした。

「それにしてもリンクか…」

腕輪を見る。

リンク…。

今回からはこれが重要になるだろうな。

「よし。」

俺は目を瞑り、コンパスをイメージする。

「あっちの方角か…」

コンパスの針の方に向けて歩きだす。

本当にこの方向でいいのか分らないが、俺が信じれるものはこの『探』の力だけだ。

なら…行くしかない。

「ていうか…」

理由は分らないがおかしい。

何がおかしいって腹が減らない…。

何も食べてないにもかかわらず、腹が減らない。

「この世界特有の何かか？」

なんてことを思いながら俺は歩いている。

歩きだして何分だろうか、一向に森から抜け出せない。

「…む。」

まだ小さくて分らないがざっざ…と誰かが歩いている音がする。
音からして1人じゃない…。

「まさか…人間？」

俺は一旦コンパスを消し、音のする方に歩きだす。
自然とその歩みは速くなる。

「いや…いやいやいや…まてよまてまて。」

俺はなに浮かれてんだ！

落ち付け。

一旦落ち付け。

フエンリルも森に居た…。

つてことはスケルトンとか言う奴が森に居る可能性もある。

それでももし見つかったら洒落にならない…。

「……何処かにいい場所は……。あそこが良いな。」

近くにあつた少し高めの草の場所に身を隠す。

そして、もう一度コンパスをだす。

「…これでスケルトンの位置もわかるのか？」

物は試した。

少し集中。そして念じてみる。

スケルトンの全体像は分らないが…恐らく四足歩行だろう。で、

角があるに違いない。

「どうだ…？」

目を開いてみる。

すると、針が少しずつ…少しずつ動いている。

「おお！！……この方向は」

前より少し大きくなってる、脚音と同じ方向だ。

成功した！

俺は成功した…！

「いやいや…ちょっと待て…だとしたら。」

この『探』ってもしかしたらすごく便利じゃないのか？

敵の位置がわかるってことは倒したい時はいつでも倒せて逃げたい時はいつでも逃げれる…。

「……………あれがスケルトン…。」

身を隠してから3分後くらいだろうか…。

とうとうスケルトンの正体がわかった。

列をなし、歩いてくるあれがスケルトン…。

骸骨が盾と剣を持つてて、身長？はだいたい175くらいか。

数はそこまで多くないな…全部で…6体か。

俺はフェンリルの時、わずかなミスで死にかけた。

それを考え…今は奴らがすぎるのを待とう。

まだ奴らと俺との距離は8mはある。

「もう少し…奥に隠れよう…。」

そう思い、俺が動こうとした時。

スケルトンの一体が何やら声を出した。

やばい！！見つかったか！？

と、思ったが違うようだ。

なぜなら。

『こいつらが…スケルトンね…………』

俺の後方、つまりスケルトンの前方に1人の女が立っていたからだ。手には一本の剣を持ち、身を構えている。

薄茶色の長い髪が風になびく。

女子にしては高めの身長。

俺の知らない制服だから…、他校か。

「覚悟しなさい!!」
女子が剣を振り上げ、スケルトンの一体に向かって走り出した…。

第14話：圧倒

彼女が剣を振り上げ、一体に斬りかかる。
が、しかし…。

ガキイ…ン。

スケルトンの盾によってそれが防がれてしまう。

「な…ならばもう一回…!!」

もう一度切りかかる。

が、またもや防がれてしまう。

そして…恐れていたことが起こってしまう…。

彼女がよろめいた一瞬のすきを狙い、別のスケルトンが彼女の腕を
その剣で…

「!?!?…キヤアアアアアアアアアア…!!!!」

ぼとつ…と嫌な音がし、剣と共に、それは地面に落ちた。

「あ…ああ…」

何だ…何が起こった…

俺の目の前で何が起こった…

スケルトンの一体が…腕を切った…

そしたら…

「あ…ああ…」

恐怖で言葉が出なかった。

「イヤアアア…!!」

腕が…腕が…

落ちた。

文字どおり、いとも簡単に…

人間の腕ってあんなに柔らかいのか…

「キヤアアッ！！」

スケルトンが盾で彼女を殴った。

彼女は派手にすっ飛ぶ…

目に涙を浮かべ、その顔は恐怖で引きつっている…

「あ……あ……」

今無き腕を抑えながら、血を噴き出しながら…

くそっ…足がすくんで動けない…

恐怖で…恐怖で心が埋め尽くされる。

俺は築かれていない…逃げるか？

逃げるなら…今しかない。

そつだ…俺の能力で勝てるわけがない…

俺が逃げて…だれも分らない…

「いや…何するの…！！！！助けて…！！助けて…！！！！」

「な！？」

彼女の悲鳴が聞こえ、その方向を見ると…

スケルトンの一体が彼女の腕をつかみ、引きずっている。

助けたい…

本当は助けたい…

でも俺には…俺にはどうすることも…

「助けてええええ！！」

彼女の、彼女のその悲鳴がもう一度響く。
その悲鳴が…

ある光景を思い起こす。

美春が連れていかれ、何もすることができず、ただ見つめるだけだった俺…。

その光景が脳裡に…

「う…うおおおおおおお！！！！！！！！」

俺は無我夢中で走りだした。

何のために？

もちろん…彼女を助けるためだ！！

「はな…せえええええ！！！！」

引きずっている奴の体に思いっきり蹴りをくらわす…

「！？」

奴の体がよろめき、そして前に派手にすっ飛ぶ。

その反動で彼女をつかんでいた手が離れた！

俺は彼女の元に走り寄り、手を掴む。

「大丈夫か！？」

何事かわかってない彼女を立たせる。

「え…え…」

「早く！！！！ここから逃げるぞ！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0873z/>

?神葬?

2011年12月21日19時50分発行